

財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C

N O . 19

目 次

松羽目の話	学習院大学名誉教授	諏訪 春雄	2
-------	-----------	-------	---

日本学術会議の舞踊図書出版とイタリア宮廷舞踊の古文書調査について			
----------------------------------	--	--	--

比較舞踊学会副会長	国枝 たか子	4
-----------	--------	---

アジアの舞踊、おりふしの雑感			
----------------	--	--	--

～カンボジア&マレーシア～

日本大学教授	丸茂 美恵子	6
--------	--------	---

自然人アイヌ			
--------	--	--	--

こころの歌と踊り

第17回 ーまりも祭りのあゆみー

アイヌ文化伝承者	四宅 豊次郎	9
----------	--------	---

平成22年度黛民族舞踊文化財団活動予定			11
---------------------	--	--	----

松羽目の話

学習院大学名誉教授

諏訪 春雄

日本舞踊の演目に「松羽目物」と呼ばれる分野がある。今も歌舞伎の人気種目となっている『土蜘蛛（つちぐも）』『釣狐』『船弁慶』『紅葉狩』などである。

これらの舞踊を演じるときには、正面奥の羽目板に大きく老松を描き、左右の袖に竹を配した舞台装置を設定するのでこの名がある。この松羽目は能舞台を模倣したものであり、能舞台では鏡板といって松羽目とはいわない。

能舞台の鏡板の様式は、中世末には確立していた。現存最古の能舞台は西本願寺の北能舞台である。天正九年（一五八一）建立の墨書きがあり、秀吉建立の聚楽第から移建したものとされる。この舞台の羽目にすでに松が描かれている。

この松は、一般には、春日大社の影響の松を写したものとされているが、折口信夫は室町時代に流行した民俗芸能の松囃子（まつばやし）の影響を考えている。松囃子は正月に松の木を持参する祝福芸で、職業的芸能者である声聞師（しょうもじ）や猿楽の徒が将軍家に参上して演じた。この猿楽の徒の芸能から能舞台の鏡板も誕生した。



熊本市菊地の民俗芸能松囃子



静岡県下田市八幡神社門前の迎神の松

歌舞伎などでは松羽目とよぶ正面奥の壁をなぜ能では鏡板というのか。

鏡板と合わせて考えるべきことばが鏡の間である。能楽で、楽屋から橋掛かりに出る揚幕の内にある部屋である。常に姿見の鏡が掛けてあるのでこの名がある。鏡の間は神聖な場所とし、婦女子を入れず、黒塗りの居台を置くほかは敷物もない。神酒と頭つきの魚を載せた三宝が二つ置かれている。鏡の間にもちいる雑巾やはたきの類は、舞台で使うものと区別される。

鏡の間は能役者に神が降臨して変身する場所である。そのために特別神聖視されてきた。鏡板もまた役者が神に変身する場所であった。亡くなられた民俗芸能学者の本田安次氏は、鏡板は能舞台に鏡の間を設けなかったときに、その代わりとして役者がここで変身をした場所であったと推定している（『能及狂言考』）。そこに松が描かれている。

年神を迎える正月の門松の習俗にも見られるように、古来日本人は、松を神々の依りつく樹木として神聖視してきた。

奈良の春日大社の影響の松は春日の神が降臨した樹木として有名であるが、じつは、春日大社のほかにも「影向松」または「迎神松」の名で伝えられる神木の松は全国にひろがって分布する。

日本人は山の樹木を神の依代として信仰対象としてきた。とくに松に限られない日本人の普遍的信仰である。全国の神社の境内に神木として信仰される木は松の木だけではない。しかし、正月の門松に代表されるように樹木信仰のなかでも松が特別視されるのはなぜか。

門松という習俗は韓国にもないし、中国にも見られない。ただ、中国では「迎客松」とよばれる民俗がある。上海などの大衆食堂には松の大木を描いた大きな絵が飾られていて、大入りを祈る招福図の意味を持っている。また、中国の安徽省の黄山には枝ぶりのよい頂上の松を「迎客松」とよび、同じ名の松は山東省の泰山にもある。中国でも松は特別視されている。その信仰と遠いところで日本の松はつながっているのであろう。



中国安徽省黄山の名松迎客松



日本学術会議の舞踊図書出版とイタリア宮廷舞踊の 古文書調査について

比較舞踊学会副会長

国枝 たか子

1. 学術会議の舞踊シンポジウム

日本学術会議が初めて舞踊書籍を出版したのは2005年である。ノーベル賞レベルの研究者を主流として、全国から各ジャンル1名ずつの計200名だけが日本学術会議会員として登録されている。芸術学からは美学出身の前田富士男先生（慶応義塾大学名誉教授）が唯一人の会員である。出版当時は神林恒道先生（大阪大学）が会員として活躍しておられたが、その後は佐々木健一先生（東京大学）に交代された。『舞踊と身体表現』編集は委員会で討議されながら進められた。しかしこの担当委員会は芸術学ではなく、文化人類学研究連絡委員会であった。原ひろ子先生（お茶の水女子大学名誉教授）中心に国際的に活動していた。舞踊研究について文化人類学・民俗学では、より広い視野から応援が行なわれていたのである。

山路興造先生（芸能学会）と石黒節子先生（舞踊学会）がオブザーバーとして参加し、私の比較舞踊学会を加えた三学会を軸にシンポジウムを毎年開催した。会場はお茶の水女子大学、日本学術会議、早稲田大学であった。舞踊と身体表現という同じ対象を研究し解明するのであるが、三学会のアプローチや研究技法が異なっているので、実に面白い展開となった。私の比較舞踊学会は身体使いや実演を伴う研究が多く、「やってみなければとうてい分からない」舞踊の法則やデータ分析をパワーポイントで提示して喜ばれた。このシンポジウムの研究成果を、一般の人々も読むことができるように出版されたのが、学術会議叢書 11 巻『舞踊と身体表現』（日本学術協力財団発行、tel 03-5410-0242）である。

その後、芸術学から学術会議で出版された話を聞いていないので、本書は貴重な一書となった。

この本の中で話題となったイタリア宮廷舞踊というテーマについてエピソードを書いてみよう。

2. バレエの源流である宮廷舞踊

佐藤俊子訳『バレエの歴史』はクリストウ著の翻訳であるが、美しいバレエに関心をもつ人々の定番として、今も読み継がれている良書である。この本の冒頭



にイタリアで宮廷舞踊が盛んに行なわれていて、その中で舞踊教師が伝えたものがバレエの源流になっていると数行書かれていた。そしてすぐにフランスの宮廷舞踊とバレエの始まりの話になってしまうのだが、私はここが胸に引っかかった。「おや?」という気分である。胸が痛い。そこで、この部分を読み解いていくことになり、ルネッサンス期の古文書を求めてフィレンツェ大学に受入れ先を定め、妹と二人で飛行機に乗った。楽しい仕事であった。まずベニスもフィレンツェも料理がおいしい。人々がフレンドリーである。古い建物が良質に保存されている。日本よりは物騒だが、調査する安全は保障されている。困ったことは人件費がべらぼうに高い。ウルビーノ城を訪ねた時のガイドは一日で 10 万円もかかった。(そんなわけで、私はいつも貧乏ひまなしである。) 舞踏の指導者には2時間で3万円を支払った。しかし解き明かすべき謎は、できる限り解いておきたい。

というわけで、キアレリ教授の後援によりフィレンツェ大学において「日本の舞踊の技法と特性」について講演した後、15 世紀古文書を国立図書館で探し出し、グリエルモ（舞踊教師）の写本から「バッサダンツァ」の研究に取り組んだ。フィレンツェはダンテが暮らした町でありルネッサンス美術品が溢れる町である。車で 20 分も郊外に出ると田舎の風景が広がり、民衆のダンスや民俗音楽が伝承されている。中世の教会からは輪舞も伝承されており（代表的なものはキャロル）、これらがルネッサンス宮廷音楽に大きな影響を与えていた。

バッサダンツァはペア×4組の8人で踊られる。（これが後に 16 人以上で踊るフランス宮廷舞踊のメヌエツトや、さらに多数のスペイン宮廷のリゴドン等に発展していく）動作は歩きが基本だが、時代を追って優雅にエレガントにコントロールされる。軽い上下動とゆるやかな八文字の左右動をともない、ツーステップとターンに発展する。おもしろいのは「おじぎ」も所作になっている。後にこれらは「バッロ」という途中で次々に拍子が変わっていく「サルタレロ」入りの軽快な舞踏へ変化を遂げるが、或る村の中世祭で、これらの復元を見ることができた。わが国で言えば「〇〇保存会」といったところである。戯れるダンスである。

バッサダンツァでは貴婦人達の衣服の豪華さを見せたりもするので、ファッションや真珠の首飾りなどを優美にゆらしながら動く所作もある。日本で言えば家元の娘に当たるような直系の舞踊教師に依頼して、教授過程と作品のいくつかを体験させてもらい、丹念に映像と速記で記録した。

後に笑ってしまったのは、私が主催している「世界舞踊祭」に、バレエの影響ではなく、イタリアの民俗舞踊の影響を取り込んでいる「バッサダンツァ」や「バッロ」が、英国、スペイン、

フランス等を介して中南米やフィリピンなどの東南アジアの民族舞踊や宮廷舞踊の一部となっているのを確認したときである。本人の予想以上に広がり大きく、人々に現在も美しくエレガントに踊られているのを見て、よりいっそう研究意欲に火が付いた。こんなことを続けていると研究者貧乏神からは逃げられないかも?と知りつつも……楽しんでいる。(完)



アジアの舞踊、おりふしの雑感

～カンボジア&マレーシア～

日本大学教授

丸茂 美恵子

前回（『民族舞踊文化』No.21）では私とアジアの舞踊との出会いと文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業の選定を受けた日本大学芸術学部NANAプロジェクトの舞踊教育機関の視察について紹介した。NANAプロジェクトは今年3月をもって終了したのだが、最後に訪問した国はマレーシアであった。プロジェクトの5年間で訪問したアジアの国は5ヶ国。いま振り返ってみると、カンボジアとかマレーシアの芸術を取り巻く環境や実態は日本ではあまり知られていない。そこで今回は、カンボジアとマレーシアを訪問した折の雑感を綴ろう。

「水で稲を刈るのはたいへんだが稲がないよりましだ」-カンボジア王立プノンペン芸術大学付属芸術学校

2008年12月25日午前、解放記念日（1月7日）に開催される独立30周年記念式典のための練習を見学した。場所は私が宿泊していたプノンペンのホテル近くのピーボワ劇場。式典に出演する古典舞踊の学生は言わば二軍ともいべきメンバー。シェムリアップのアンコール遺跡ではアプサラダンス・ショーが観光名物で、それに出演する選抜メンバーが一軍である。その日の練習は大勢の輪踊りで中心にサーカスの学生、前列に古典舞踊の学生、外輪には民俗舞踊の学生、男子はイーケー劇やバサック劇などの学生を集めている。

練習に立ち会っていたパオ・ティアン（Mr.Por Teang）芸術学校長に学校の概要についてお伺いしたところ、学科は舞踊（古典舞踊・民俗舞踊・カオル）、演劇（イーケー劇・バサック劇・現代劇）、音楽（古典音楽・現代音楽・アヤイ・チャペイ）、サーカス、造形芸術に分かれていて、生徒数は約1,180人で学生寮はなく自宅から通ってくるという。

その日の午後は車で30分ほどデコボコ道を走ってバンサヤーにある芸術学校を訪ねた。ここもプノンペン市内だが、まったく無味乾燥な地に私が失望したのは前号で報告した通り。授業は午前が実技で午後



〈カンボジア〉 記念式典の練習
前列は古典舞踊の学生 台はサーカスの学生

は座学のはずだが、その日はクリスマスのため学生もまばらで授業はほとんど行われていない。案内役のバサック劇の先生は「外国では芸術家はお金持ちがやるがカンボジアでは貧しい人がやる。先生は教えたくとも給料が安く車のガソリン代がないから学校に来られない」等々、実際に抱える問題の多くを熱心に語ってくれた。

前日、文化芸術省を訪問した際に「水で稲を刈るのはたいへんだが稲がないよりましだ」とブン・セン首相の言葉を教えていただいた。その言葉には、「どんなにたいへんであっても次世代を担う子どもたちに指導者が一生懸命がんばっていかねばならない。今まであった文化を無くさないようにして発展させていきたい」という意味があるそうだ。

「伝統を持ちつつも前へ進む」-マレーシア国立芸術文化遺産大学

国際交流基金の「文化人招へい」プログラムで来日されたマレーシア国立芸術文化遺産大学（ASWARA）のモハメド・ガウス・ビン・ナスルディン学長（Prof.Mohamed Ghouse Bin Nasuruddin）が昨年7月に日大芸術学部で特別講義をされ、NANAプロジェクトとも意見交換をしたことから、今年3月2日に ASWARA を訪問した。

ASWARA は現在ヘリテッジの教育課程がなく、学生たちの創作活動を中心に舞踊、演劇、音楽、映像、クリエイティブ・ライティング、造形の6学部がある。こちらのキャッチフレーズはカンボジアのような切実さはなく、「伝統を持ちつつも前へ進む」。「温故知新」と相通じる精神がみられるが、欧米化された日本では伝統文化という特定の分野でこそ重んじられる言葉が、マレーシアでは国立の芸術大学の教育方針であることに日本の文化的な差を感じざるを得ない。親日で知られるマレーシアなので、クリエイティブ・ライティングの中では歌舞伎や近松などの日本の古典を扱っているという。

見学は舞踊の授業を主に企画され、民族舞踊の授業ではリズムカルなマレーの民族音楽に合わせて歩き方の練習をしていた。これはイナン・ダンスと呼ばれる宮廷の召使いの踊りでノリが早い。コンテンポラリー・ダンスでは、ドイツ政府が設立した国際文化交流機関であるゲーテ・インスティテュートから派遣されたドイツ人の先生による授業（イメージ創作）、インド伝統舞踊



〈マレーシア〉 民族舞踊の授業
イナン・ダンスの歩き方の練習

の先生による授業（伝統を現代にどのように活かすか）、香港の演劇学校卒業の若い先生による授業（側転の練習）の3つを見学。コンテンポラリーの受講生は伝統的な舞踊より人数が多いのは日本もマレーシアも若者の事情は同じようだ。

その後、マヨンという宮廷舞踊と大衆マレー音楽を鑑賞しながら、用意された昼食を戴いた。マヨンは男役も女性が演じ、道化役だけ男性が演じる。最初は儀式の挨拶から始まり、物語は大体、旅で王子様に出会うとい

う内容で道化によってその状況が説明されるというもの。

偶然にも ASWARA に日大大学院博士課程に在籍していたマレーシアの留学生が専任として着任していた。彼女はマヨンと狂言との共通性を研究し実践に移したいという抱負を語ってくれた。

まだまだ知られていないアジアの舞踊・・・、日本へ来て勉強をした留学生やアジアへ留学した日本の若者たちによって、何れアジアの舞踊、いや音楽も演劇もそれらの全容がつまびらかになるのはそう先のことではなかろう、と予感したマレーシアの旅であった。



〈マレーシア〉

ワヤン・クリ（影絵人形芝居）
の授業 楽器の練習

＝自然人 アイヌ＝

こころの歌と踊り

アイヌ文化伝承者

四宅 豊次郎

第 17 回 —まりも祭りのあゆみ—

東北海道も10月に入り、阿寒湖周辺を見渡すと四面の山々は次第に紅葉の度合いが深まってゆく。

アイヌコタンでは数日前から「まりも祭り」の準備がはじまって、いよいよ10月9日は「まりもを迎える儀式」、翌10日は「まりもを送る儀式」となり、全道はもとより全国各地からアイヌ民族のウタリ（同族・仲間）や、親しい関係者が約三百人程参加する。

昭和25年10月に第1回目の「まりも祭り」をはじめたが、平成21年（2009年）で無事に60回を終えた。

近年は外国の方々も多く加わるようになって国際色豊かである。

北海道の秋は全体的におだやかな天候に恵まれて過ごしやすい。

「まりも祭り」は、その時代によっては台風の影響などを受けたこともあったが、大事にはいならず、一度も中止に



マリモをもつアイヌメノコ

なかったことがない。大自然に感謝するアイヌの祭りを天界や自然界のカムイ（神々）が見守って下さっているものと、私達アイヌは理解している。

この時期は行楽シーズンの中でも観光客が最も多く、阿寒湖周辺の景観やまりもの観察センターなどで身近に見たりして、感動して家路に帰られる。

また、観光船の航行中は、遊覧ガイド嬢が阿寒に関する説明をして、「まりもの唄」をうたいながらアイヌ伝説を語るのも、より一層阿寒湖の印象を深めることになります。



平成 21 年（2009 年）の阿寒湖アイヌコタンシマフクロウ＝アイヌ語でコタンコロカムイ（村を護る神様）は動物の最高神

——「セトナとマニベの物語」 その1——

マリモにまつわる伝説は、アイヌにもありますが、それは後に述べることにする。

さて、ここに記す「セトナとマニベ」の伝説は、実はアイヌの伝承ではなく、大正時代に朝日新聞の記者をしていた青木純二の創作というのが有力だ。

大正15年、第百書房刊・青木純二著の「アイヌの伝説」という本の中から「悲しき蘆笛（あしぶえ）」の導入部を見てみると、「釧路の北方に、茫漠たる釧路平原を瞰下（かんか）して、夏でも白く雪をいただいている夫婦山がある。雄阿寒岳、雌阿寒岳がそれである。

女夫の間には、千左（せんさ）の秘密を青藍の水にたたえて、莊厳そのもののように静かに横たわっている阿寒湖がある。

阿寒湖の畔に、モノペットという小部落があり、今から五百年も昔、モノペットの酋長シパチにセトナという美しい一人娘がいた。

自分の生れた土地が総ての世界であり、自分の住んでいる村が世界の都であると思っているセトナの胸には、母の愛にすがり、父の温情にたよる外は不満も哀愁もなかった。

家に飽（あ）けば召使の息子マニベの肩に乗って山によじ登り、谷に下りなどして無邪気な日々を送ったのである。

深藍の湖の水のような瞳の色、豊麗な頬のふくらみは、セトナにピリカメノコ（美人娘）の名を完全にかち得させたのである。

（※ピリカ・メノコの条件は、単に美顔、容姿端麗であるばかりではない。何よりも心根が優しくなければならない）

湖の畔に、白い小さな鈴蘭の花が咲き乱れる頃、蘆の葉陰に名も知らぬ小魚の飛び上る夕暮から、セトナの十六回目の誕生の祝宴は開かれた。

青木純二の原点とされるものは、約四千五百字にのぼる長いもので、やがて時代と共に文章も簡潔、美化されてゆく。

——「セトナとマニベの物語」 その2——

昭和26年 7 月の釧路新聞（今の北海道新聞）に二回にわたり掲載された「秘められた二つの魂、天然記念物・恋マリモの伝説」の導入部。

「夕暮となれば陽落ちる空に近い西の湖畔のナナカマドの実の紅くこぼれるほとりに、むかしモノペットという小さな部落があった。

酋長はシパチといい、村一番のピリカメノコ・セトナは幼い頃から幸福だった。」

家に居れば下僕の息子・マニベが勇ましい戦争の話や、ブシ矢（毒矢）で鹿や熊を獲る時の話を聴かせてくれたし、晴れた日にはマニベの肩に乗って野や山を駆けめぐり、それに飽きるとマニベが悲しげな蘆笛を吹いてくれた。」
わずか6年後で、文体も内容も解りやすくなっている。原典ではスズランの咲く初夏の物語となっているが、ここではナナカマドの実が紅くこぼれる秋の季節に変化している。

最後に釧路の長老・山本多助が昭和15年に今の日本交通公社から発刊した「阿寒国立公園とアイヌの伝説」から、「セトナと毬藻（マリモ）の話」の一部を書く。

「昔のことでありました。阿寒湖の西岸にモノッベ（モノペットが変化している）という部落がありました。そこにシッパチ（シパチが変化）と呼ばれる偉い酋長がおり、その娘にセトナというピリカメノコがいました。そのセトナも十六の春を迎え、いよいよ婚礼の日がきました。

そして花婿に定められたのは副酋長の次男メカニでした。メカニは村一番のやくざ者でしたから、セトナは日頃から快く思わず、自分の家の下僕であるマニベを心密かに慕っていました。マニベは勇敢で気だてのよい青年だったのです。」

ここまでは山本多助の著の中にあるのだが、後にはラジオ劇で放送されたりして、何人かの作者の物語が混同して作られている。

これからは遊覧ガイドやバスガイドが、現在案内している内容になる。

（この物語は次回につづきます）



平成 21 年 10 月 9 日、第 60 回「まりも祭り」でカムイノミ（神への祈り）を行う四宅豊次郎（左側）



〈マレーシア〉 ASWARAの学生による
マヨンの上演 右端は男役



〈マレーシア〉 ASWARAにて
向かって右から5人目がナスルディン学長、左隣は丸茂氏

平成22年度黛民族舞踊文化財団活動予定

平成22年

5月12日（水） 黛民族舞踊文化財団総会

10月26日（火）～11月3日（水）

黛民族舞踊団訪中（中国雲南省玉溪市、怒江州）

平成23年

3月1日（火） 世界舞踊祭（国立劇場）公演に黛民族舞踊団参加

研究報告誌出版予定

舞踊文化 E. T. C. No.19発行

民族舞踊文化 No.22発行

舞踊文化 E. T. C. No.19

発行人 犬丸 直

平成22年5月12日発行

港区赤坂 3-10-3

編集人 大野 晃

財団法人 黛民族舞踊文化財団

電話 03-3583-3633

FAX 03-3583-3639